

「蒼のシテン」から始まる物語

教育委員会生涯学習室・本村 雅宏

1. 「気づき」と「問いかけ」

ドラマしかない。そう思うまでにはかなりの時間を費やした。

子どもたちが生きる力を育むための体験活動は以前に比べて明らかに意図的に進められている。子どもなんて放っておけばいいと、投げやりで力任せでも結果的にたくましい子どもが現れた時代とは違う。指導者や支援者においても、ノウハウと経験を蓄積して、子どもたちに何かをさせるのでも預かるのでもなく、体験を通じて学びを形成していこうとする意図がどの活動においても明確になってきている。

一方で問題になってくるのは、子どもたちの出会いや感動、心の動き、思いや願い、そうしたものを受け止められる存在がちゃんとくらしの各場面に存在するのかということである。向き合い、受け止め、分かち合ってくれる存在がなければ、体験を生き方の価値として反映することは困難である。

教師や指導者はもちろん、親や家族がその責務から逃れる理由はない。

人は善く生きようとする存在であり、子どもとともに善く生きようと思わぬ親はない。多くの人々は、子どもたちに向き合い、受け止めることが大切であると考えている。また、できればそうありたいと願っている。しかし、子どもとどう寄り添い、何を受け止め、どんなまなざしで向き合っていけばよいかについて躊躇する人は少なくない。子どもたちの豊かな育ちの過程を理解しながらも、その一歩を踏みとどまってしまう人はいくらかもいる。

また、子どものためにと、さまざまなことを繰り返しながら、それが子どもの思いや願いとズレを持っているために、いつも割り切れなさを残してしまう場合も多い。そして、重要なのは、そのズレに気付くことの難しさだ。

子どもや家族の体験活動の情報提供やコーディネートを行う富山県子ども元氣

活動支援センターの事業として、広報啓発のためのテレビ映像を作ろうとした背景がこれである。だれもが少しでもいい状態にあるとしながら、ズレていく関係。ズレを調和するには、関係の体質を変える必要がある。

答えはいつも未明の荒野にあり、曙光を得て、何がどんな姿で明らかになっていくかは、誰にもわからない。しかし、その荒野には豊饒の可能性が眠っており、意志によって拓かれるのを待っている。その意志を喚起するのは、警句でも善意や良心を気取った道徳風の呼びかけでもなく、それぞれの内側に想起される「気づき」であり、そこからはじまる「問いかけ」ではないのか。

啓蒙ではない。多くの人々は価値を「知っている」のである。だが、逡巡し、停滞している。「知ってもらう」価値を提示したところで、家族が作り出す新たな物語の劇的な一歩の始まりを促せるか。お節介がましい煩わしさと、教



条つたらしい言説は、ただただこれまでの焦りを増幅し、佇む人を揺さぶれない。一歩の衝動は新たな問題の発現としてもたらされる。この映像がもたらすものは、処方箋や回答、解決方法でも、わかりやすい善悪や倫理でさえなく、子どもたちとの人間関係、家族関係への「気づき」と「問いかけ」でなくてはならない。

それはドラマにしかできない仕事。ボクらはそう考えた。

文字が浮かび上がらせる想像力は陳腐な映像をはるかに凌駕する。よく描かれたことばは、映像よりもしばしばリアルだ。しかし、文字やことばは主体的に捉えようとする意思に因らなければ、意味が伝わらない。ほんの一瞬で表情と意味を伝えられる映像の特性は、劇的な一歩を踏み出せないでいる人々の関心を引き寄せるに適している。ここには、「あるべき家族」の主張はない。「気づき」を誘引し、「問いかけ」を喚起するドラマ。

冗漫にならず、それでいて深みがあり、なおかつ明晰でおもしろい。1話3分1テーマ複数話構成で全体のテーマへの接近法を示す。

少なくとも、これまでに見たことのないドラマになることだけは確かだった。それも当たり前だ。ボクらは、既存のスタイルの閉塞感を超えるために、かつてないアプローチを仕掛けることでしか、この仕事の価値を見つけられなかったのだ。

2. 「問いかけ」とシテン

では、何を映像とし、物語とするのか。制作者がまず、「子どもとは何か、家族とは何か」の「問いかけ」を迫られる。

構成に苦しんだ。議論は繰り返される。理論や規範でなく、制作にかかわるそれぞれの家族と自分の姿がそのまま構成のための議論の対象となった。制作者の「問いかけ」が、実は視聴する人々の「問いかけ」に重なっている。答えを示

すのではなく、答えを求めるベクトルを表すのだとは思っていても誰も答えをもたない。ただ、その「問いかけ」が妥当なものかどうかを徹底して検証していく作業が続く。同時に、賛否を呑み込んで議論の中心となれる視点を持ちうること。そのため、撮影は富山の特徴ある風土を避け、日本のどこにでもあるような近郊都市とした。どこか際立った場所の、特別な誰かに依存した物語。それはボクらが作るべきドラマではない。どこかのだれかに似ているどこにでもいる夫婦1男1女の「山東家」に起きる出来事から、家族のズレを描く。結末めいた展開を敢えて切り取り、そこから発展するであろう「問いかけ」の手がかりとなる「気づき」を映像に仕込む。1話ごとの終末はまるで裏切るように、視聴者に投げ出される。その先は視聴者に受け継がれなくてはならない。

移ろう家族関係に物語も流れて行く。子ども



写真：ドラマ「蒼のシテン」より

をつなぐりの軸として家族の姿が変容し、ズレがいつしか共有される時空間を軸に調和していく展開によって、家族の位相を表す。

絞り出されたのは8話(注1)。映像は家族が生まれる、喜びの表情だけでなく、悲しみや憤り、不安といった陰翳のトーンも含めて、映画の色調をまとうて描く。汚れない清浄な家族などどこにもない。みんな数々の混沌を抱えながら、ともに生きようとする。このドラマには、悪意のある人物は一人も出てこない。誰もが善く生きようとしている。その生き方のベクトルと位相を「問いかけ」るドラマとなった。

ドラマタイトルは「蒼のシテン」とした。〈青〉ではなく、陰翳を纏った〈蒼〉。「シテン」は、まなざしとしての〈視点〉でもあり、家族同士の〈支点〉でもある。

〈視点〉や〈支点〉は局面ごとに移ろい、彼我の関係の変節と変容を繰り返す、視聴者においてさえ、とりとめのない「気づき」と付随する「問いかけ」に圧倒される思いにすらなる。人との議論を得て「問いかけ」は新たな止揚の局面をもたらすこともあるだろう。(注2)

3. 地域と和解「もうひとつの物語」

「蒼のシテン」では、家族を描くことで子どもと向き合うことへの「問いかけ」を提案した。しかし、問題は家族のうちにあるばかりではない。家族間にあったズレと同じ「問いかけ」は、家族と地域の間にも横たわっており、見過ごすことができない。そこで、家族と地域を描く

「蒼のシテン2」の制作が現在進められている。(注3)

実は続編ではない。「蒼のシテン」全体を覆っているテーマは、すでに「蒼のシテン」第8話で父と子



の未来として提示されており、そこに至る家族の物語と平行するように、家族に關係の変容を促す地域との「もうひとつの物語」があったという設定である。

家族は家族の内部でだけ関係し、変容するわけではない。親も子もそれぞれに地域につながり、そのなかで過去と未来を持ちながらくらししている。接点が小さい地域社会にこそ、むしろ人と家庭を育む土壌がある。「蒼のシテン」第8話に至るには、この家族のそれぞれが地域と描いてきた物語が横たわっている必要がある。敢えて家族に限定した「蒼のシテン」を「もうひとつの物語」で補完し、新たな表現を加えることで、「蒼のシテン」はようやく家族の〈いま/ここ〉からの「はじまりの物語」になる。

Profile

本村 雅宏 (ほんむら まさひろ)

1962年朝日町生まれ。

海に臨み、山を仰ぎ、川や野に遊ぶ空想科学少年として育つ。高校生の頃「文転」し、以後、ことばとからだについての思考と思索を繰り返す。釣れない釣り師だが、「ブンガクの釣り」と囁く。

小学校教員10余年、現在、生涯学習室社会教育主事。青少年教育を担当する。



(注1)

各話の内容については、富山県子ども元気活動支援センターウェブサイト「こどもげんきドットコム」<http://www.kodomogenki.com>で提供する「蒼のシテン」活用ガイドを参照。

(注2)

「蒼のシテン」本放送、平成15年10月～11月。同12月、平成16年5月に再放送。平成16年3月、8月には、エルネットで全国放送。また、視聴の機会や研修会での利用を広げるため、VHS、DVDを制作。現在、県と各市町村子ども元気活動支援センターを通じて教育委員会や学校、社会教育団体などの公的機関だけでなく家庭や民間のグループでの貸し出し利用が行える。申し込みは、富山県子ども元気活動支援センターか、各市町村子ども元気活動支援センターへ。

TEL/FAX 076-4445-1844 E-MAIL:kodomo@kodomogenki.com

(注3)

チューリップテレビで10月18日(月)から毎週月曜日5話連続放送予定。

詳しくはチューリップテレビのウェブサイト。 <http://www.tulip-tv.co.jp>